

6. チェーンソー

事例は5例である。チェーンソー事例一覧表にその概要を示した。

チェーンソーによる事故については、林業・木材製造業労働災害防止協会、いわゆる林業防災が、あらゆる事例を例示し、かつ繰り返しチェーンソーや刈払機の使い方などの研修を行っており、そこから学ぶべきことが多々あり、今後これらの研修に参加することでチェーンソーの安全な使い方の技量を磨くことが最も重要である。

しかしながら、これらのプロの世界に比較すると農業をやりながら兼業的に林業労働的な作業を行なっている事故の実態の一端を多くの関係者に知っていただくため、あえてここに事例を示し、プロの方々の安全指導を仰ぎたいものである。

事例内容は、受傷者から聞き取った内容である。

①木の伐採中、一気に木が倒れてきた

N01（平成23年11月、畑の土手、男・50歳）

畑の土手（50m、傾斜約50°、下に90cm幅の用水。その下は水田）の木で畑が日陰になるので、上から5mほどを整理しようとチェーンソーで切っていた。直径8cmぐらいのクヌギなどの木が多かったが、蔓が絡まっており、切っても倒れなかった。そのうちに一気に木がどさっと倒れ落ち、木の株が頭に当たった。他人に殴られたような感じだった。頭が濡れたように感じたので、汗かなと思って触ってみると頭は血だらけだった。シャツの上側も同様だった。

父親がそばにいたので車で近くの診療所にすぐに連れて行ってもらった。

他の疾患で入院日が決まっていたので焦っていた。入院日が気になって落ち着きがなかった。奥さんから「気をつけるように」とメールが何度か入っていた。チェーンソーで木を切るときはヘルメットが必須だと思った。野球用のヘルメットも良さそうだ。なお、チェーンソー使用歴10年、年間約30日使用。

②山でチェーンソーを使っていて、滑って膝を切る

N02（平成23年5月、山林、男・72歳）

山林で一人で作業をしていた。地面は湿っており、滑ったときの丸太も濡れていた。間伐や下草刈りなどの手入れが必要だった。直径25cmの木を切ろうと、チェーンソーをもって、空ふかしして、木のそばに行こうとしたが、約45°の坂で棒があり、それに足を滑らせた。その際にチェーンソーの刃が左膝上に触れて切れた。痛みもなく、出血もなかったが、カマイタチのように、ぱっくり切れていた（割創）。幅は1cmぐらいあった。



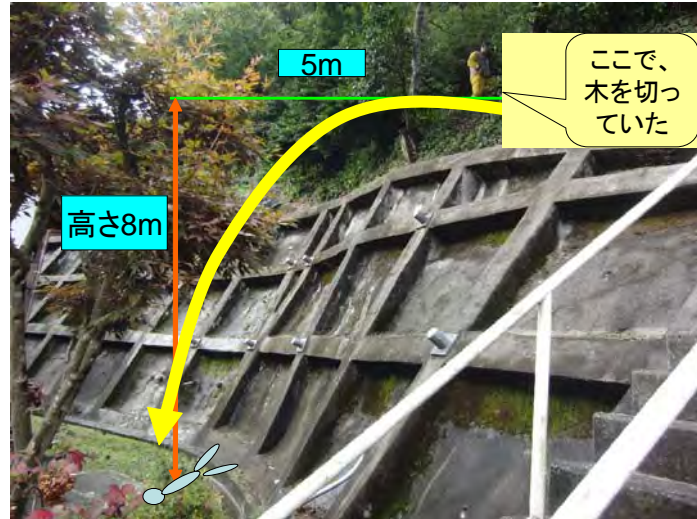
翌日に結婚式があり、気が焦っていた。「こういう突発的な事故はなかなか防ぐことは難しい」と本人。自分で病院へ行き、12針縫ってもらった。

③崖っぶちで木を切っていて8 m下に転落

N03（平成22年 1月、裏山、男・72歳）

チェーンソーは若い頃山林仕事でよく使っていた。

自宅裏山で、崖淵の急傾斜の所の直径18cmの樁の木をチェーンソーで切っている際に、切った木が足下にぐらっと転がり、体を崖下に押し出すように寄りかかってきて、踏ん張り切れず足を滑らせ8m程下に転落した。落ちる際に、自ら足を蹴って、飛び降りるような形で落ちたので、頭から落ちなかった。法面



は12m、斜度は68～70°のコンクリート面。真下もコンクリートであったが、飛んだため、先に落としておいた木の枝や葉の塊の上に落ち、クッションとなった。

昔、親戚の手伝いで山仕事を手伝い、チェーンソーを使ったこともあり、危ないとは思いつつ、とくに対策は取らなかった。昔は山作業の時は、いのち綱など安全対策をしていたが、林の管理は兼業であり、プロ的意識で作業に臨んでいなかった。

妻が見ていたので、すぐに救急車を手配してくれた。左骨盤、左恥骨、左座骨、左長骨骨折、左胸外傷性血胸。

④山で木を伐採中、滑落

N04（平成22年 1月、山林、男・76歳）

山に入って、急斜面でチェーンソーを使って木を切っていた。この地域は雪の多いところだが、当日は雪は積もっていなかった。1cmほどのスパイクのついた地下足袋を履いて作業していたが、滑って2回転したあと、尻をついたまま40～50m下の谷底まで斜面を滑り落ちてしまった。チェーンソーは動いたまま手を離れて先に滑り落ちていき、下の方からチェーンソーの音が聞こえていた。滑り落ちたときに、石で右眼の縁を打って、内出血で青くなった。総合病院を受診、網膜剥離で、手術をしないといけないということだったが、しばらく経過観察。2ヶ月してから10日ほど入院して手術をしたが網膜剥離ではなく硝子体出血であった。今でも右眼の視力は低下したままである。

急斜面で転落防止ロープ（いのち綱）をつけず、スパイクの長さも急斜面の割には短く、かつ、ヘルメットもしていなかった。

⑤樹園地で伐採した木の小枝を切っていて受傷

N05（平成23年 4月、山林、男・32歳）

N05は、樹園地において、改植をするためサンフルーツ15年生をチェーンソーで伐採していた際、長さ51cmの小さいチェーンソーだったので、片手で持ち、もう片方の手で枝を持って枝を細かくしていた。スロットルレバーから指を離したので、回転が止まっていると思っていたら、依然として回転していて、チェーンソーで左指を切った。



事故後、電話で近くの病院に連絡したらチェーンソーの怪我は対応困難といわれ、同僚に60分かかる遠くの病院に連れて行ってもらった。

＜農村におけるチェーンソーの事故の特徴＞

チェーンソーは、最近ではホームセンターでも手軽に手に入る機械であるが、残念ながら販売店では安全講習を施すことはまずない。手軽でハンディなものはなおさらである。

農村の中山間地では、自宅の裏山や昔からの山林を片手間に管理することが多い。そのため、チェーンソーの使用についての安全講習を受ける機会は、林業労働者に比較して、皆無に近く、運転免許証のないものが車を運転するような状態である。さらに、ハンディなチェーンソーは、軽くて操作性が良かったため、ついつい片手で使用することが多い。しかし、どんなに小さくても、チェーンソーはチェーンソーであり、基本的使用法を熟知しておく必要がある。

チェーンソーの基本的使い方、癖も知らないだけでなく、さらに安全装備、例えば今回の事例にもあったように、スパイク、転落防止用ロープ（いのち綱）、ヘルメットの未装着が当たり前のよう横行している。

なお、一端チェーンソーで受傷すると、チェーンソーによる傷口は何ミリかの幅で溝ができる。この傷口の縫合はかなり困難であり、一般の診療所では対応出来ない場合もあり、搬送に次ぐ搬送になり、手遅れになる可能性もはらんでいる。

以上のことから、地域によっては農協等での農作業安全で、「チェーンソーの安全使用について」講習することも必要である。